

文樂に『杖』

演劇

例年の如く人形舞臺の文樂座が演舞場へ出る。

第一回の一日より五日間

の興行は初步的にはいい出し物だ。即ち第一に近松の名作『國姓爺合戦』の三段目が出て『樺南』は南部太夫で悪くない。次の『獅子ヶ城』の大隈は上出来の上、文五郎の和藤内の母は老巧だが、『紅流し』の白太夫は言語明晰を欠く。

人形は和藤内を若手の玉助が遣ふが、もつと大きく遣ふ心づかひが要る。なほ太夫たちは「五常軍甘輝」と語つてゐるのに、番附は近頃誤つてゐる「五將軍」

となつてゐるのは困る。が、錦祥女と母との可弱い女が命をすてる犠牲的精神によつて、この作の終局が一変する所に、國策男和藤内以外の日本精神が光る。

第二は竹田出雲の名作『菅原の寺子屋』、これで近松と出雲とが一夕で分るわけか。古軼の得意藝だが前より奥がよく、松王の「泣き笑ひ」が最もうまい。この人の藝風が變つて来たからであらう。第三は若手連で『朝顔日記』。但し、大入り満員は結構だが、人形と太夫とにもつと活を入れない。後進を育てたい。それこそ將來の文樂の「杖」だからである。(三宅周太郎)

三三劇評三三

演舞場の文楽

第一回は五日まで。先づ「國姓爺合戦」柄杓女道行は童話風にまとまつてゐて、よい小品になつてゐる。樓門から獅子ケ城、紅流しと續いて、紋十郎の錦祥女、位もあり美しくていいのである。

その錦祥女の自害を發見した文五郎の老母が、つと吾が生みの子の和藤内をかへりみて、義理の娘の忠義の死をその一瞬間目顔で語る、この心理的周到には畏れ入つた。

次は「寺子屋」古靱太夫。桐竹龜松の武部源藏、家へ帰つて來るところから、松王丸の出までの間、歌舞伎芝居の内攻的な演じ方と違ひ、鬨氣に富んだ表現的な動きを見せるのが面白く適切である。

榮三の松王、首桶を持つて來られた時、刀に倚りかゝるやうにして身体を斜に持ちこたへてゐる間、実に悲痛に感じた。

最後は「朝顔日記」紋十郎の深雪、可憐な出來、背景その他安びかで、幻想を破られる。もつと古風に出來ぬものか。(福原麟太郎)

三宅周太郎著

修改 文樂の研究

【書選元創】

定價一・五〇 (各階賣店ニアリ)

文部省推薦圖書

目次……………

上、文樂物語
 大序の人々
 津大夫の教訓
 文樂の沿革
 文樂で古い人々
 初代二代目古頼大夫
 故瀧六の語
 お客奇人二
 一人一代
 義大夫武勇傳
 故名庭弦阿彌の語
 文樂總稽古(舞臺稽古)

文樂と義大夫との謎
 中、文樂人形物語
 焼けた人形残った人形
 人形の愚劣
 人形遣ひさまさま
 人形細工人とその方法
 人形の起原と淡路の人形
 女形に異なるもの
 人形雑話
 植村文樂軒の代々
 下、批評と研究
 人形と芝居との忠臣蔵比
 較研究

人形淨瑠璃と芝居との
 「組打」及び「陣屋」
 人形淨瑠璃と芝居との
 「袖萩祭文」
 人形淨瑠璃と芝居との
 「盛綱」
 人形淨瑠璃の「加賀見山」
 の「草履打」
 「嬉景清八島日記」と「鑼
 倉三代記」
 キンケードの人形論
 — 其他
 (寫眞版十六頁)

「文樂」復興の書

中外商業新報評

これは昭和五年に出版されたものを、更に改修補訂してこの度び「創元選書」に入れられ舊著の二分の一にも足りない廉價版となつて再び世に出たものであるが、當時昭和初年、越路太夫歿後文樂の興行が不振を極めてゐたのが、本書の出版によつて識者の反響を喚び、人形淨瑠璃への關心が深まつたといふ評判の本である。前半「文樂物語」は名人への修業の苦難が如何に眞剣深刻であるかを教へたもので、文樂を全く知らざる者にとつても興味ある、好讀物である。後半「批評と研究」は歌舞伎と人形淨瑠璃との比較對照で、院本と淨瑠璃本の脚本の交錯を、著者の廣汎なる芝居知識で解剖し盡してをり、敬服の他はない。之らは實際の舞臺面についての明細な批判だけに、三宅氏ならではのし得ざるものだ。(文部省推薦圖書)

版元

東京愛宕山元
 振替東京五六一
 電話四合八三〇
創元社

藝道一筋

田口竹男

最近文樂は、年に一度か二度上京すると、きまつて大入満員で、入るのに苦勞するくらゐださうである。嘗て僕はこれに感溺した。近頃では、さうした盛況の噂を耳にすると、行くのが臆劫になり、減多に覗いた事がない。しかし行かないでも、榮三、文五郎、津太夫、古靱太夫の如き老大家の依然として健在である今日、文樂も行くのなら、いまの内だといふ事を身に沁みて感じてる。十年越しの「いまの内」である。

それまでも相當僕は文樂見物に行つた

ものである。しかし、眞實、文樂に目を開かせ、仇や疎かにはとても行けないやうな壓力と魅惑を感じさせてくれたのは、三宅周太郎氏の著「文樂の研究」によつてである。

氏によつて世に紹介された文樂の人々の藝道物語は、藝術に憑かれた古くて新しい眞實の感動を我々に與へずにはおかないのである。僕の如き、氣持のだらけた時には、必ずこの書を讀み返すことにしてゐる。黙々として、藝道一筋に進む文樂の人々の姿は、嚴肅そのものゝ感動である。讀みながらいくど僕は、この人々の前に慚死すべし、と思はせられたことか。

今日の隆盛に浮かされて、かなりいゝ減な仕事に寧日もなき新劇を觀る暇があつ

たら、文樂なるものを、參考程度の氣持でも結構故、一度覗いていたゞきたい。今日の新劇や商業芝居では到底充されない、演劇の豐潤さが、温かさが、コンコンと湧き出てゐるのを、必ずや感ぜられるであらうことを、確く信じて疑はない。

繰返していふ。「文樂の研究」は單なる文樂のみの研究ではない。演劇の書であり、更に藝術の書である。讀みだしたら、どんなに文樂などの世界から縁遠い人々でも、夢中になつて讀み耽り、感動を受けずにはられないだらうことを太鼓判を捺しておく。甚だザツパクな文章で、三宅氏には或ひは御迷惑かもわからないけれど、敢てこの小生愛讀の書のために、宣傳役を買つて出る次第である。(「劇作」四月號所載)